

芭蕉連句年譜

廣田二郎

芭蕉全集の編纂は、仏兮・湖中の『俳諧一葉集』（文政十年―一八二七―刊）に始まつて、勝峯晋風氏の『新芭蕉一代集』（昭和六年―一九三一―刊）にまで至つてゐる。^(一)勝峯氏の業績は、文政以後昭和に至るまでの芭蕉研究の集積の上になされてゐるのであつて、『一葉集』からみて、やはり一世紀以上を経ただけの豊富確実さを加へてある。しかし、その後のためみなき研究者の努力によつて、『新芭蕉一代集』も訂正され、増補されなければならない点が多く明らかにされてきた。それらの研究の成果の上に立つて、当然新しい、完全な芭蕉全集が編纂されなほさなければならぬであらう。その基礎になるべき業績として、すでに俳句・俳文・書簡等には、すぐれた完全に近い作品集が刊行され、作品の制作年代についても綿密正確な推定がなされてゐる。それによつて、われわれは、芭蕉の生涯にわたつての作風・思想の展開のあとを見、かれの作品の全体を知ることができるのであるが、さうした中で、全作品を収めた連句集はまだ刊行されてをらず、^(二)年代推定にしても、全作品にわたつては、勝峯氏の線からは推し進められてゐない。昭和二十六年刊の拙著『芭蕉連句集』も所収作品は、歌仙・百韻合はせて四十八巻にすぎず、同書附録の

芭蕉年譜に掲げた連句作品も歌仙・百韻・五十韻・四十四だけをとりあげたにすぎなかつた。完全な芭蕉全集編纂のための基礎作業の一環として、信頼のおける芭蕉連句集を編纂することは私の念願とするところであるが、そのしごとと一端として、ここに「芭蕉連句年譜」を作つてみることにした。このしごとは、芭蕉の全作品にわたつて、その真偽を判定し、制作年代を推定した上でなされなければならない。つまり、「年譜」は、作品の真偽判定と制作年代考証の結論として作製されるべきものである。私も当然「年譜」といつしよに作品の真偽判定と制作年代に関する考証も発表する予定でをつたが、与へられた紙幅の制限から、今回は「年譜」だけしか発表できなくなつてしまつた。真偽判定、年代考証（成立考）については、追つて、なるべく近い将来に発表したいと考へてゐることを附記しておく。

年譜凡例

一 全作品を制作年代順に排列して一連番号を附した。（同年同季の作品については、厳密には制作の順序が判定できない場合が少くない。さうした場合には、同一出典所収のものについては出典における排列の順序、出典の異なる場合には、発句の季語等から適宜順序を与へてみた。）

二 作品番号の下の（ ）の中の符号は、「百」は百韻、「歌」は歌仙、「半」は半歌仙、「和漢」は和漢歌仙を示し、その他はすべて句数をあらはした。たとへば五十韻は「五〇」、四十四は「四四」、表八句は「八」、二十四句の端物は「二四」の如くである。

三 附句は（ ）でかこんで、その一部分を示しておいた。

四 連衆は全員を最初の一巡の順に挙げておいた。従つて、最初に挙げてあるのが発句の作者である。また、何名かを隔てて出てくる作者は、その間に……を引いてそのことを示しておいた。これによつて作品の成立の事情も見う

るものがあるであらう。

五 出典は、原則として最古の板本を挙げることにしたが、中には一般によく知られてゐるものを探つた場合もある。刊本のないものは、信頼するに足る写本稿本によつた。

六 備考欄には、年代推定について参考になる事項、なほ考慮を要する点、日時のはつきりしないもの等について適宜摘記した。

七 普通の芭蕉作品集に採られてゐる作品の中、真偽の疑はしいものとして本年譜に採らなかつたものを「存疑」として後に一括して掲げた。これらは真偽判定の考証を経て、芭蕉作品集から除き去られるべきものであらう。なほ参考として、これらの存疑作品につき、贅川他石氏の年代推定（日本名著全集『芭蕉全集』）を参考までに記しておいた。

制作年代		作品		品		備考
年号 (年齢)	月日	番号 種類	発句 (附句)	連衆	出典	
寛文五乙巳 (三三)	二 三	一 (百)	野は雪にかるれどかれぬ紫苑哉	蟬吟・季吟・正好・一笑・以宗房	芭蕉桃青翁御正伝記	貞徳十三回忌追善俳譜。
七丁未 (三四)		二 (附)	1今を峠と、2しゃかの槍、3おだ巻の)	宗房	続山井	寛文七年、もしくはそれ以前作
一〇庚戌 (三七)		三 (附)	1がけ作り、2冷じき)	1助勝・正朝・宗房 2長忠・定就・宗房	一葉集	年代推定は『一葉集』による。
延宝三乙卯 (三三)	五	四 (百)	いと涼しき大徳也けり法の水	宗因・碓面・幽山・桃青・信章 木也・吟市・少才・似春	談林俳譜	

<p>四丙辰 (三三)</p>	<p>五(附) (茄子の煮物、あな蔵のふた、かねにてかはん) 六(附) (飾竹の、都出て、寝てねころも、さうしては) 七(百) 此梅に牛も初音と啼つべし 八(百) 梅の風俳諧国にさかむなり</p>	<p>桃青 桃青 桃青・信章 信章・桃青</p>	<p>当世男 続連珠 江戸両吟集 江戸両吟集</p>	<p>延宝四年又はそれ以前作。</p>
<p>五丁巳 (三四)</p>	<p>九(歌) 実や月間口千金の通り町 一〇(百) 色付や豆腐に落て薄紅葉 一一(歌) わすれ草煎菜につまん年の暮 一二(百) あら何ともなやきのふは過てふぐと汁</p>	<p>桃青・二葉子・紀子・卜尺 桃青・杉風 桃青・千春・信徳 桃青・信章・信徳</p>	<p>江戸通り町 芭蕉・杉風 一葉集 江戸三吟</p>	<p>又は六年作か。五年又はそれ以前作か。</p>
<p>六戊午 (三五)</p>	<p>一三(百) 物の名も蛸や古郷のいかのぼり 一四(百) さぞな都浄瑠璃小歌は愛の花 一五(百) 須磨ぞ秋志賀奈良伏見でも是は 一六(百) 見渡せば眺むれば見れば須磨の秋 一七(歌) のまれけり都の大気江戸の秋 一八(歌) 青葉より紅葉散けり旅ぎせる 一九(歌) 塩にしてもいざことづてん都鳥 二〇(附) (1 簗笠小槌、2 菖蒲のかつら、3 是も) 又、4 菩提もと、5 はや舟にのり 二一(附) (「蚊にさくれ行」ほか一九句)</p>	<p>信徳・桃青・信章 信章・信徳・桃青 似春・四友・桃青 桃青・四友・似春 春澄・似春・桃青 似春・春澄・桃青 桃青・春澄・似春 1、2、3、4 宗房 5 晚秋・桃青 桃青</p>	<p>江戸三吟 江戸三吟 芝香集 芝香集 江戸十歌仙 江戸十歌仙 江戸十歌仙 江戸十歌仙 江戸通り町 江戸広小路</p>	<p>又は五年作か。</p>
<p>延宝末年</p>	<p>三(附) (鯛売声に、すいきの声) 三(百) 錦とる都にうらん百つゝじ</p>	<p>愚句(桃青)</p>	<p>真澄の鏡 武蔵曲</p>	<p>六年又はそれ以前作。右に同じ。</p>

<p>天和元辛酉 (三八)</p>	<p>二千戌 (三九)</p>	<p>三癸亥 (四〇)</p>	<p>天和年中</p>	<p>貞享元甲子 (四一)</p>
<p>四(吾) 鶯の足雉脛長く継添て 五(百) 春澄にとへ稲負鳥といへるあり 六(百) 世に有て家立ば秋の野中哉 七(四) 附贅一つ爰に置けり曰ク露</p>	<p>六(歌) 花にうき世我酒白く食黒し 元(歌) 詩あきんど年を貪ル酒債哉 三(歌) 飽やことし心と白の轟と</p>	<p>三(附) (鶯のある花の賤屋と) 三(歌) 夏馬の遅行我を絵に見る心かな 三(歌) 胡草垣穗に木瓜も無家かな</p>	<p>四(三) 栗野老山齒染尉が秋こそあれ</p>	<p>三(二) 芭蕉野分その句に草鞋かへよかし 三(二) 宿まいらせん西行ならば秋のくれ 三(二) 華の咲身ながら草の翁かな 三(歌) 師の桜むかし拾はん落葉哉 三(二) 霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申し 四(二) 能程に積りかはれよみの雪 四(六) 此海に草鞋捨ん笠しぐれ</p>
<p>桃青・其角・才丸・揚水 其角・才丸・揚水・桃青 才丸・揚水・桃青・其角 揚水・桃青・其角・才丸</p>	<p>芭蕉・一品・嵐雪・其角・嵐蘭 其角・芭蕉 李下・其角…芭蕉</p>	<p>(はせを) 芭蕉・麿峙・一品 麿峙・一品・芭蕉</p>	<p>青府・一品・桃青</p>	<p>李下・芭蕉 雷枝・翁 勝延・翁 塔山・芭蕉・木因・如行 如行・芭蕉 木因はせを 芭蕉・桐葉・東藤・叩端・如行 コ山</p>
<p>次 次 次 次 韻 韻 韻 韻</p>	<p>虚 虚 虚 栗 栗 栗</p>	<p>谷 木 因 一 葉 集 叢 虫 庵 小 集</p>	<p>一 葉 集</p>	<p>春 と 秋 幽 蘭 集 春 と 秋 元 祿 風 韻 後 の 旅 幽 蘭 集 熱 田 三 歌 仙</p>
<p></p>	<p>又は三年作か。</p>	<p>又は二年作か。</p>	<p></p>	<p>以下六五まで『野ざらし紀行』の旅中の作。</p>

(貞享二)

貞享三丙寅
(四三)

<p>三七 天(歌) 何とはなしに何やら床し葦草 三三 弄(歌) つくづくと稷の花の袖にちる</p>	<p>芭蕉・叩端・桐葉 桐葉・芭蕉・叩端・閑水・東藤 ……桂楫</p>	<p>熱田三歌仙 熱田三歌仙</p>	
<p>四 六(三) 杜若我に発句のおもひあり</p>	<p>芭蕉・知足・桐葉・叩端・業言 自笑・如風・安信・重辰</p>	<p>千鳥掛 幽蘭集</p>	
<p>六(歌) ほととぎす爰を西へかひがしへか</p>	<p>如行・叩端・閑水はせを・ 桐葉・東藤・コ山・桂楫</p>	<p>幽蘭集</p>	
<p>三(三) おもひ立木曾や四月のさくら狩</p>	<p>はせを・東藤・桂楫・叩端・ 桐葉・コ山……閑水</p>	<p>幽蘭集</p>	
<p>三(歌) 牡丹麩深くはひ出る蜂の別哉</p>	<p>芭蕉・桐葉・叩端</p>	<p>ゆめのあと</p>	
<p>四 九(二) 夏草よあづま路まとへ五三日</p>	<p>知足・桃青</p>	<p>千鳥掛</p>	
<p>空(附) 「二町ほど」ほか九句</p>	<p>翁</p>	<p>春と秋</p>	<p>貞享元一二年作</p>
<p>六 二(百) 涼しさの凝くだくるか水車</p>	<p>清風・芭蕉・嵐雪・其角・才丸 コ斎・素堂</p>	<p>芭蕉翁古式 之俳諧</p>	
<p>一 七(百) 日の春をさすがに鶴の歩み哉</p>	<p>其角・文鱗・枳風・コ斎・芳里 杉風・仙化・李下・拳白・朱弦 蚊足・ちり・芭蕉・揚水・不卜 千春・峽水</p>	<p>鶴の歩</p>	
<p>三 二(六) 花咲て七日鶴見る麓哉</p>	<p>芭蕉・清風・拳白・曾良・コ斎 其角</p>	<p>一橋</p>	
<p>六(二) 古池や蛙飛びこむ水の音 七(五) 深川は葦さく野も野分かな</p>	<p>はせを・其角 風瀑・芭蕉・一品・琴蔵・虚洞</p>	<p>不猫蛇 丙寅紀行</p>	<p>貞享三年以前作</p>

芭蕉連句年譜

(貞享四)

二七五	(歌) 星崎の闇を見よとや鳴千鳥	芭蕉・安信・自笑・知足・羨言 如風・重辰	千鳥掛	
二九六	(六) 置炭や更に旅ともおもはれず	越人・知足・芭蕉	千鳥掛	
二一三	(三) 表はえてよきかくれ家や畑村	はせを・越人・野仁	合歡のいびき	
二二六	(六) 焼食や伊良古の雪にくづれけん	知足・芭蕉・越人	千鳥掛	
二二七	(歌) 笠寺やもらぬ窟も春の雨	芭蕉・桃青・知足・如風・重辰・ 安信・自笑・僕言	千鳥掛	
二二八	(四) 幾落葉それほど袖もほころびず	荷兮・芭蕉・知足・野水	千鳥掛	
二二〇	(三) 面白し雪にやならん冬の雨	芭蕉・自笑・知足	千鳥掛	
二三三	(歌) 磨直す鏡も清し雪の花	芭蕉・桐葉	雪の花	二二―二四日作。
二二	(二) 葉のむさらでも霜の枕かな	はせを・起倒	如行子	二四日頃作か。
二二六	(三) 楓のさむさかさねよ稲葉山	桐葉・芭蕉 落梧・芭蕉・荷兮・越人・羽笠 舟泉・野水	如行子	
二二六	(歌) ためつけて雪見にまかる紙子哉	はせを・昌碧・龜洞・荷兮・ 野水・聴雪・越人・舟泉	如行子	
二三	(半) 旅人と我見はやさん笠の雪	如行・はせを・桐葉		一日作か。
二三	(六) 霰かとまたほどかれし笠やどり	如行・夕道・荷兮・野水・はせを	如行子	
三四	(歌) 箱根越す人もあるらし今朝の雪	芭蕉・聴雪・如行・野水・越人 荷兮	たねたはら	
三九	(半) たび寝よし宿は師走の夕月夜	芭蕉・一井・越人・昌房・荷兮 楚竹・東睡	熱田三歌仙	

	<p>二三 二〇(二) 歩行ならば杖つき坂を落馬哉</p>	<p>芭蕉・土芳</p>	<p>三冊子</p>	<p>中旬作。</p>
<p>二</p>	<p>二三(歌) 何の木の花ともしらず匂ひ哉 一〇三(一七) 紙衣のぬるとも折む雨の花</p>	<p>芭蕉・益光・又玄・雪庵・勝近 清里……の人 芭蕉・乙孝・一有・杜国・応宇 葛森</p>	<p>芭蕉翁俳諧 集 一幅半</p>	<p>一五日以前作。</p>
<p>四</p>	<p>一〇四(二) 時雨てや花迄残るひの木笠 一〇五(二) さまぐの事おもひ出す桜哉 一〇六(三) 杜若語るも旅のひとつかな</p>	<p>その女・翁 芭蕉・探丸子 愚句(芭蕉)・一笑・万菊 己百・はせを</p>	<p>笈日記 冬扇一路 枇杷園隨筆</p>	<p>中旬作。</p>
<p>六</p>	<p>一〇七(二) するべして見せばやみの、田植哥 一〇八(歌) 鼓子花の短夜ねぶる屋間哉</p>	<p>芭蕉・奇香・尙白・自笑・通雪 松洞……宜秋……江山…… 宦江……一龍</p>	<p>芭蕉扇俳諧 集</p>	
<p>六</p>	<p>六一七 一〇九(六) どこまでも武蔵野の月影涼し</p>	<p>寸木・芭蕉・荷兮・越人・落梧</p>	<p>水月一双</p>	
<p>六</p>	<p>六一九 一一〇(五〇) 蓮池の中に藻の花まじりけり</p>	<p>秋芳 芦文・荷兮・芭蕉・越人・惟然 炊玉・落梧・蕉笠・己百・梅餌 露蛩・鷗歩・捨景・用呂・東巡</p>	<p>つばさ</p>	
<p>七</p>	<p>七二 一一二(二) 見せばやな茄子をちぎる軒の畑 一一三(三) 蔵のかけかたばみの花めづらしや 七三 一一三(六) よき家や雀よろこぶ背戸の粟</p>	<p>惟然・翁 荷兮・落梧・翁 芭蕉・知足・安信</p>	<p>笈日記 笈日記 千鳥掛</p>	
<p>七</p>	<p>七〇 一二四(歌) はつ秋や海も青田のひとみどり</p>	<p>はせを・重辰・知足・如風・ 安信・自咲</p>	<p>幽蘭集</p>	

元祿元戊辰
(四五)

(貞享五)

(元祿元)

元祿二己巳
(四六)

七三

二五(歌) 色くのきくもひとつの匂ひ哉

二六(歌) 粟稗にとほしくもあらず草の庵

二七(歌) 雁がねもしづかに聞ばからびずや

二八(半) 月出ば行燈消サン座敷かな

二九(半) しら菊に高き雞頭おそろしや

三〇(附) (打提る、ぬけ初る)

三一(歌) 其かたち見ばや枯木の杖の長け

三二(歌) 雪の夜は竹馬の跡に我つれよ

三三(歌) 雪ごととうつばりたはむ住居哉

三四(歌) 水仙は見るまを春に得たりけり

三五(歌) 衣装して梅改むる匂ひかな

三六(歌) かげろふの我肩に立紙子哉

三七(三) 月花を両の袂の色香哉

三八(歌) 秣負ふ人を枝折の夏野哉

四

二七

叩端・桐葉はせを・東藤・

コ山・閑水

芭蕉・長江・荷令・一井・越人

胡及・鼠弾

越人・芭蕉

越人・苔翠・芭蕉・友五・夕菊

泥芹・依々

杉風・越人・翁・苔翠・友五・

夕菊・依々・泥芹

はせを

芭蕉・夕菊・苔翠・友五・素堂

路通・曾良

路通・宗波・友五・はせを・

岱水・曾良・夕菊

岱水・路通・はせを・友五・

曾良・宗波・嵐竹・雨洞・夕菊

縁糸

路通・杏香・翁・龜仙・泉川

曾良・前川・路通・はせを

はせを・曾良・塔山・此筋

露沾・翁

芭蕉・翠桃・曾良・翹輪・桃里

幽蘭集

秋の日

曠野

柱曆

かしま紀行

千鳥掛

幽蘭集

幽蘭集

幽蘭集

春と秋

真向翁

雪まるげ

陸奥衛

貞享年中作。

一、二、八、一、五、五
は「奥細道」旅
中の作。六日の作。

(元祿二)

四一六	二九(二)	落くるやたかくの宿のほととぎす	風羅坊・曾良	雪まるげ	
四〇	一〇(歌)	風流のはじめや奥の田植歌	芭蕉・等躬・曾良	信夫摺	二二―二三日作
四二四	一三(歌)	かくれ家や目だぬ花を軒の栗	芭蕉・栗斎・等躬・曾良…… 須卒……素蘭……等雲	伊達衣	
四二九	二三(三)	旅衣早苗に包食こはん	曾良・芭蕉・等躬	信夫摺	
四	二三(三)	茨やうをまた習ひけりかつみ草	等躬・曾良・芭蕉	信夫摺	二九日作か。
四	一四(四)	雨はれて栗の花咲跡見かな	桃雪・等躬・芭蕉・曾良	信夫摺	二九日作か。
五	一五(歌)	五月雨を集めて涼し最上川	翁・一栄・曾良・川水	雪まるげ	
六	一六(歌)	お尋の我宿せばし破れ蚊帳	風流・芭蕉・孤松・曾良・柳風 ……如柳・木端	雪まるげ	
六	一七(三)	水のおく氷室たづぬる柳哉	芭蕉・風流・曾良	雪まるげ	一一―二日作。
六	一八(三)	風の香も南に近し最上川	芭蕉・柳風・木端	雪まるげ	
六四・五	一九(歌)	有難や雪をめぐらす風の音	翁・露丸・曾良・釣雪・珠妙・ 梨水……円入	花摘	
六一〇	二〇(歌)	めづらしや山を出羽の初茄子	芭蕉・重行・曾良・呂丸	初茄子	
六一四	二一(七)	涼しさや海に入たる最上川	翁・令道・不玉・完連・曾良・ 任暁・扇風	奥細道拾遺	
六	二四(歌)	あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ	芭蕉・不玉・曾良	継尾集	一九―二一日作
七	二四(三)	忘なよ虹に蟬鳴山の雪	会覚・はせを・不玉	継尾集	
七	二四(三)	文月や六日は常の夜には似ず	翁・左栗・曾良・眠鷗・此竹 布囊・右雪……義年	奥細道拾遺	
七	二五(二)	星今宵師に駒牽て留めたし	右雪・曾良・芭蕉……更也	金蘭集	

(元祿 二)

七 八	一四(四) 葉園にいづれの花を草枕	翁・棟雪・更也・曾良	雪まるげ	
七 七	一四(四) 寝る迄の名残也けり秋の蚊屋	小春・芭蕉・曾良・北枝	ゆめのあと	一六日作か。
七 二〇	一四(半) 残暑暫手毎にれうれ瓜茄子	芭蕉・一泉・左化・ノ松・竹意 語子・雲口・乙州・如柳・北枝 曾良・流志……浪生	花の故事	
七 二五	一四(四) しほらしき名や小松ふく萩芒	翁・鼓蟻・北枝・斧卜・塵生・ 志梧・夕市・致益・歛生・曾良	草のあるじ	
七 二六	一五(五) ぬれて行人もおかしや雨の萩	翁・歛生・曾良・北枝	一葉集	
八	一五(歌) 馬かりて燕追行わかれかな	北枝・曾良・翁	卯辰集	四日作か。
九 三	一五(二) もの書て扇引さく名残かな	翁・北枝	卯辰集	
九 三	一五(半) 野あらしに鳩吹立る行脚哉	不知・荆口・芭蕉・如行・左柳 残香・斜嶺・怨風	桃の白実	
九 四	一五(歌) はやう咲九日も近し宿の菊	翁・左柳・路通・文鳥・越人・ 如行・荆口・此筋・木因・残香 曾良・斜嶺	桃の白実	
九	一五(二) 胡蝶にもならで秋ふる菜むし哉	翁・如行	後の旅	三―六日作か。
九	一五(二) 秋の暮行先くの苦屋かな	木因・翁	笈日記	六日作か。
九 八	一五(歌) 一泊り見かはる萩の枕かな	路通・蘭夕・白之・残夜・芭蕉 曾良・木因	芭蕉林	
二 一	一五(歌) いざ子供はしりありかん玉霰	芭蕉・良品・梢風・三蘭・土芳 半残	木葉集	
	一五(歌) 霜に今行や北斗の星の前	百歳・式之・芭蕉・夢牛・村鼓 槐市・梅額	壬生山家	元祿二年作か。

芭蕉連句年譜

	<p>二 一六(五) 暁や雪をすきぬく藪の月 一六(二) 少将の尼のはなしや志賀の雪</p>	<p>園風・梅額・半残・土芳・良品 風麦・芭蕉・木白……配力 芭蕉・智月</p>	<p>芭蕉集 俳諧集 智月真蹟</p>	
<p>元祿三庚午 (四七)</p>	<p>二 一六(一) 鶯の笠落したる椿かな 一六(二) 種芋や花のさかりに売ありく 一六(三) 木のもとに汁も繪も桜かな 一六(四) 木のもとに汁も繪もさくらかな 一六(五) 木のもとに汁も繪も桜かな 一六(六) 木のもとに汁も繪も桜かな 一六(七) いろいろの名もむつかしや春の草 一六(八) 市中は物のにほひや夏の月 一六(九) 秋立て干瓜辛き雨気かな 一七(一) 灰汁桶の雫やみけりきりくす 一七(二) 見送りのうしろや寂し秋の風 一七(三) 白髪ぬく枕の下やきりくす 一七(四) 月しろや膝に手を置宵の宿 一七(五) 月見する座にうつくしき顔もなし 一七(六) 稗柿や鞠のかゝりの見ゆる家</p>	<p>桃青・乍木・百歳・村鼓・式之 梅額・一桐・槐市・呉雪 翁・半残・土芳・良品 はせを・風麦・良品・土芳・ 雷洞……半残……三園……木白 翁・風麦・良品・土芳・雷洞 ……半残……三園 芭蕉・珍頌・曲水 珍頌・翁・路通……荷兮・ 越人 凡兆・芭蕉・去来 及肩・珍頌・之道・昌房・正秀 探志・翁 凡兆・芭蕉・野水・去来 翁・野水 芭蕉・之道・珍頌 翁・正秀 芭蕉・尙白 珍頌・之道・翁</p>	<p>何袋 己ヶ光 花はさくら 蓑虫庵小集 ひさご ひさご 猿蓑 江鮭子 猿蓑 みつのかほ 江鮭子 笈日記 夕顔の歌 江鮭子</p>	<p>才一八句までは 前巻と同じ。</p>

(元祿三)	元祿四辛未 (四〇)
<p>一六(歌) 鳶の羽も刷ぬはつしぐれ 一七(歌) ひき起す霜の薄や朝の門 一八(歌) さびしさの底ぬけて降曇かな 一九(歌) 半日は神を友にやとし忘</p>	<p>一八(歌) 梅若菜まりこの宿のとろ汁 一八(歌) 梅若菜鞠子の宿のとろ汁 四三(五) 芽出しより二葉に茂る柿の実 一三(歌) 蠅ならぶはや初秋の日数かな 一四(歌) 牛部屋に蚊の声よはし秋の風 八二(五) やすくと出ていぎよふ月の雲</p>
<p>去来・芭蕉・凡兆・史邦 丈草・支考・翁・史邦・去来・ 野童 丈草・去来・翁・鼠弾 芭蕉・示石・凡兆・去来・景桃 乙州・史邦・玄哉……好春</p>	<p>芭蕉・乙州・珍碩・素男…… 智月・凡兆……去来……正秀 ……半残・土芳……園風・猿雖 ……嵐蘭・史邦・野水・羽紅 風羅坊・乙州・珍碩・素男…… 智月・凡兆……去来……探志 其角・路通・曲水……里東・ 芹花……素葉・寒水・落荷 ……飛陰 史邦・蕉・去・丈・乙 去来・翁・路通・丈草・惟然 芭蕉・路通・史邦・丈草・去来 野童・正秀 はせを・成秀・路通・丈草・ 盤子・貉睡・正則・楚江・勝重 葦香・菟苓……正幸・重吉…… 重民……柴茂・柳沅・絃五</p>
<p>猿 叢 鵜 の 音 一 葉 集 物 の 親</p>	<p>猿 叢 勧 進 牒 嵯 峨 日 記 折 つ し 星 会 集 堅 田 集</p>
	<p>才二〇句(二表 才二句)までは 前巻と同じ。</p>

元祿六

四	三三(二) 春風や表の中行水の音 三三(三) 春嬉し野は蝶鳥になつかしく 三四(歌) 篠の露袴にかけし茂り哉 三五(歌) 風流のまことを鳴やほととぎす 三六(歌) 朝顔や夜は明けきりし空の色 三七(歌) 初茸やまだ日数経ぬ秋の露 三八(歌) 帷子は日々にすさまじ鴟の声 三九(半) 名月やさふく雨のはれをまで 八二六 三〇(歌) いざよひはとり分闇のはじめ哉	木導・翁 其角——芭蕉 芭蕉・千川・涼葉・左柳…… 涼葉・芭蕉・青山・曾良・濁子 嵐蘭・岱水・曲翠・嵐雪 史邦・沾圃・翁・魯可…… 里圃・乙州 翁・岱水・史邦・半落・嵐蘭 史邦・はせを・岱水 濁子・芭蕉・千川・涼葉・此筋 芭蕉・濁子・岱水・依々…… 馬寛……曾良……涼葉 濁子・曾良・芭蕉・史邦・杉風 岱水・涼葉	笈日記 金蘭集 鄙懷紙 俳諧歌仙七部拾遺 翁草 猿舞師 小文庫 鄙懷紙 鄙懷紙 鄙懷紙	四月九日以前作。
九一三	三二(歌) 十三夜あかつき闇のはじめかな 三三(三) 月やその鉢木の日のひた面 三三(三) 漆せぬ琴や作らぬ菊の友 三四(歌) 振売の雁あはれ也ゑびす講 三五(三) 寒菊や小糠のかゝる日の傍 三六(歌) いさみ立鷹引すゆる嵐かな 三七(歌) いさみ立鷹引居る嵐かな 三八(歌) 芹焼やすそ輪の田井の初氷 三九(六) 武士の大根からきはなしかな	翁・沾圃・其角 素堂・翁・沾圃 芭蕉・野坡・孤屋・利牛 芭蕉・野坡 里圃・沾圃・芭蕉・馬寛 里圃・沾圃・馬寛・芭蕉 芭蕉・濁子・涼葉 芭蕉・玄虎・舟竹	翁草 翁草 炭俵 初便 統猿蓑 こと葉の露 鄙懷紙 金蘭集	元祿六年作か。 元祿六年作か。

元祿六	元祿七甲戌 (五)
<p>二三〇(三) うしろ風鳶の身ぶるひ猶寒し 二三一(歌) 雪の松おれ口みれば尙寒し 二三二(半) 雪やちる笠の下なる頭巾まで 二三三(歌) 生ながらひとつにこほる生海鼠哉</p>	<p>二三四(八) 年たつや家中の礼は星月夜 二三五(三) 長閑さや寒の残りも三ヶ一 二三六(三) 雛ならで名乗を名乗る人もがな 二三七(歌) むめがくにのつと日の出る山路かな 二三八(歌) 傘におし分見たる柳かな 三三九(歌) 五人ふち取てしだるゝ柳かな 三四〇(歌) 八九間空で雨降る柳かな 三四一(半) 水音や小鮎のいさむ二睨瀬 三四二(歌) 空豆の花さきにけり麦の縁 三四三(歌) 紫陽草や藪を小庭の別座敷 三四四(歌) 新麦はわざとすゝめぬ首途かな</p>
<p>玄虎・舟竹・芭蕉 杉風・孤屋・芭蕉・子珊・桃隣 利牛・岱水・野坡……沾圃・ 石菊・杉風……利合・依々…… 曾良 杉風・翁・岱水・依々・曾良 ……野坡 芭蕉・岱水……杉風</p>	<p>其角・介我・岩翁・枳風・彫棠 横几・芭蕉・仙化 利牛・岱水・翁 ……沾圃・翁 芭蕉・野坡 芭蕉・涼葉・野坡・利牛・堂波 曾良・濁子 野坡・芭蕉 芭蕉・沾圃・馬寛・里圃 湖風・翁・沾蓬・利牛…… 桃隣……曾良 孤屋・芭蕉・岱水・利牛 芭蕉・子珊・杉風・桃隣・八桑 山店・芭蕉</p>
<p>冬扇一路 炭俵 継はし 木曾谷</p>	<p>萩の露 一葉集 翁草 炭俵 鄙懐紙 続寒菊 続猿蓑 芭蕉翁集 俳諧集 炭俵 別座敷 小文庫</p>
	<p>初旬作。 元祿七年作か。</p>

(元祿七)

五	二五〇 (二) やはらかにたけよことしの手作表	芭蕉 真蹟集	中句作。
五四	二四八 (歌) 世は旅に代かく小田の行戻り	ゆずり物	
閏五三	二四七 (半) 水雞鳴と人のいへばや佐屋泊	笈日記	
	二四六 (歌) 柳小折片荷は涼し初真瓜	市の庵	
	二四九 (歌) 牛ながす村のさはぎや五月雨	砂川集	
	二五〇 (歌) 鶯に朝日さす也竹閣子	となみ山	
	二五一 (歌) 葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉	となみ山	
	二五二 (歌) 夕顔や蔓に場をとる夏座敷	ゆずり物	
	二五三 (歌) 夕顔や蔓に場をとる夏座敷	歌仙七部拾遺	才二二句までは前巻と同じ。
	二五四 (二) 菜種ほすむしろの端や夕涼み	笈日記	
六一六	二五五 (歌) 夏の夜や崩て明し冷し物	続猿蓑	
六二二	二五六 (歌) 秋ちかき心の寄や四畳半	鳥の道	
	二五七 (二三) ひら／＼とあがる扇や雲のみね	桃 舐	路通等によつて 繼がれ歌仙満尾
七二四	二五八 (三〇) 残る蚊に袷着て寄る夜寒哉	壬生山家	
	二五九 (歌) つふ／＼と掃木をもるゝ履寒哉	壬生山家	
	如舟・はせを		
	翁・荷々・巴丈・越人・長江		
	桃里・傘下・桃首・大椿……		
	釣雪		
	はせを・露川・素覧・		
	芭蕉・酒堂・去来・支考・文章		
	素牛		
	諷竹・去来・芭蕉・惟然・文章		
	支考……野明		
	浪化・去来……芭蕉		
	去来・浪化・之道・芭蕉・文章		
	支考・惟然・野童・野明		
	為有・翁・素牛・鳳侶……等		
	為有・翁・惟然・鳳侶……		
	(露川・如行・松屋・夷始)		
	曲翠・翁		
	芭蕉・曲翠・臥高・惟然・支考		
	翁・木節・惟然・支考		
	翁・安世・支考・空芽・土龍		
	丹野		
	雪芝・翁・風麦・玄虎・苔蘇		
	望翠・惟然・土芳・雪芝・猿離		
	翁・卓袋・九節		

(元祿七)

七六	二六〇(二) 折々や雨戸にさわる荻の声 二六一(歌) あれくゝて末は海行野分哉	雪芝・翁 猿雖・芭蕉・配力・望翠・土芳 卓袋……苔蘇	一葉集 今日の昔	八月九日以前作
八九	二六二(六) いなづまに額かゝえる戸口かな 二六三(六) 松茸や都にちかき山の形	土芳・猿雖・翁 惟然・土芳・猿雖・翁	一葉集	
九三	二六四(歌) 松茸やしらぬ木の葉のへばりつき	翁・文代・支考・雪芝・猿雖・望翠・惟然・卓袋……荻子	芭蕉翁 俳諧集	九月三日以前作
九四	二六五(五) 松風に新酒をすまず夜寒哉 二六六(歌) 猿義にもれたる霜の松露哉	支考・猿雖・翁・雪芝・惟然 沾圃・芭蕉・支考・惟然	蜜柑の色 続猿蓑	
九四	二六七(歌) 升買て分別かはる月見かな	翁・畦止・惟然・洒堂・支考 之道・清流	住吉物語	
九	二六八(歌) 秋もはやはらつく雨に月の形	翁・キ柳・支考・洒堂・游刀 惟然・車庸……之道	画兄弟	一八日作か。
九三	二六九(半) 秋の夜をうち崩したる嘶かな	芭蕉・車庸・洒堂・游刀・諷竹 惟然・支考	松濤集	
九二	二七〇(三) 秋風に吹れて赤し鳥の足 二七一(半) 此道や行人なしに秋の暮	洒堂・諷竹・はせを 芭蕉・泥足・支考・游刀・之道 車庸・洒堂・畦止・惟然・龜柳	柴橋 其便	
九七	二七二(歌) 白菊の目に立て見る塵もなし	芭蕉・園女・諷竹・謂川・支考 惟然・洒堂・舍羅・何中 翁	菊の塵	
	二七三(附) 「その鬼見たし」ほか一四句 二七四(附) (咲花に)	はせを	一葉集 去來抄	貞享元祿年中作 貞享元祿年中作

存疑

制作年代(贊川氏)	種類	発句	連衆	出典
天知年中	(歌)	時節嘸伊賀の山越華の雪	杉風・桃青	花供養集
元祿二年	(歌)	いざかたれ馳走はなくもふゆごもり	綱彦・芭蕉・卜枝・因勝	陽炎集
元祿二年	(歌)	すゞしさを我やどにしてねまる也	芭蕉・清風・曾良・素英……風流	つなぎ橋
元祿二年	(歌)	おきふしの麻にあらはす小家かな	清風・芭蕉・素英・曾良	つなぎ橋
元祿二年	(歌)	あなむざんやな胄の下のきりくす	翁・享子・鼓蟾	印の竿
元祿五年	(歌)	鶯や餅に糞する縁の先	翁・支考	百轉
元祿五年	(歌)	蒟蒻にけふは売かつ若菜哉	はせを・嵐雪	若菜記
元祿五年	(歌)	両の手に桃と桜や草の餅	芭蕉翁・嵐雪・其角	未
元祿六年か	(歌)	重くと名月の夜や茶臼山	桃青・立圃	さいつころ
元祿元年冬ならん	(三)	皆拜め二見の七五三をとしの暮	はせを・岱水・曾良・嵐竹・宗波・路通・友五 泥芹・夕菊	幽蘭集
延宝七年か	(八)	さくげたり二月中旬初茄子	桃青・杉風・仙風・龜・惣代・而已	一葉集
年次不明	(三)	薄原龍のいびきに鹿の声	御・某甲・芭蕉	金蘭集
年次不明	(三)	笠寺や乗敷さます一すゞみ	闇指・其角・翁	一葉集
元祿二年に入る	(二)	あかくと日はつれなくも秋の風	翁・光晴	一葉集
年次不明	(二)	何となく柴吹風もあはれ也	杉風・芭蕉	一葉集
脇年次不明	(二)	ひよろくと猶露けしや女郎花	はせを・	幽蘭集
年次不明	(三)	百景や杉の木の間にいろみ草	翁・浪化・去来	幽蘭集
年次不明	(附)	赤人も今一入の酒きげむ	珍碩・翁	幽蘭集

註

- (一) 勝峯氏には、その後『芭蕉全集』（日本文学大成—昭和二十三年刊—）の編著があるが、これは上巻（季題別句集・紀行集・日記・句合評語集・文集・俳論作法集等）が刊行されただけで、下巻は未刊である。
- (二) 小宮豊隆氏の『芭蕉連句集』は昭和五年十二月十日刊で、勝峯氏の『^新編芭蕉一代集』（昭和六年四月十五日刊）より前のものである。芭蕉の連句作品のうち七十九巻を収めてある。
- (三) ここに「……青山……此筋……遊糸……大舟」が脱けたので補つておく。

未だ考へ得ず 貞享四年	(三) 湖水より光り出しけり比良の雪 (六) 松杉にすくひあげたるみぞれかな (三) いざさらば雪見にころぶ所まで よき家や雀よろこぶ背戸の秋	はせを・文章・許六 去来・許六・芭蕉・千那 はせを・左見・怒風・野人・支考・政江 翁・知足・露川	幽蘭集 幽蘭集 幽蘭集 記念題
----------------	--	---	--------------------------